

奥相茶話記 卷第四

當家權輿並祭例條々

三郡役騎被相定事

被誅木幡主水盛清事

青田信濃振權事

信濃逆意露顯事

青田信濃落行事並草野小一郎被討事

佐藤伊勢夜討事

磯邊合戰事

中村黒木殘黨和陸事

名取郡北目合戰御加勢事

當家權輿並祭例條々

或人當家の從來を問答て云夫桓武の御嫡男葛原高明公五代の苗裔にて御坐す御父は高望王の二男鎮守府將軍良將下總國相馬郡を領し給ふ相馬小次郎將門と申奉るは時の大臣にて御坐す故に筑紫の内一國を領し給ふ政道不邪延喜の末公卿奢甚して宴遊を事として色を重し

とす悉民下に苦み天下義を失ひり將門其不道を悲み給て藤原純友と謀て兵を起さんとし給へり純友彼も筑紫一國の領主也其沙汰京師に隠れ無りければ左右の大臣奏達を経て將門を召て宇治に押籠らる又宇治にして將門事を巧むの由叡聞に入り源善淵に綸旨を下し宇治に發向せり善淵は清和天皇の御子貞保親王の息目宮の子也將門防戰に利なくして朱雀院の御宇承平の始宇治を去て總州相馬郡に下向し給て良望を前給ふ鎮守府將軍良望は良將の兄にして將門の伯父也良望聞給はず將門良望を討相馬郡守屋に都を建百官を進退して自平親王と號し給ふ此事都に隠れなかりしかば官軍を催し良望の男鎮守將軍貞盛武將として關東を責らるゝこと度々に及べり天慶年中將門討死也と云將門の伯父鎮守府將軍良文の御子忠頼へ相馬郡を賜る忠頼千葉の元祖なり彼源善淵は滋野海野望月根津の祖也彼系圖に將門の事業を詳に載と云り又問云ちけんまるかしと申て將門より相馬代々の秘寶ありと云又蛇太刀と云るは何ぞや答云相馬の嫡々相傳て他人の知る事に非ず此物無形無相の寶と云りされば日本紀に神籬と云ふあり神道者深く秘せり吉田と平野

と神籬を争ふ事有り吉田云神籬は春日大明神より大織冠に傳り夫より意美丸に渡りて我家に有他人の知事に非ず諸神を我がまゝにする事は此神籬ある故也是を天津岩鏡共名付く平野云春日大明神天降玉へし時天照大神の授け玉へし物也垂仁天皇の時新羅の王子來て七寶を献す其中に熊神籬あり是は別の物なり神代の神籬は年久しければ我家になしまして他人の知る物に非ずと云世降人下て神籬を不知此神籬と申すは一切の神體なるべし我國昔より巫祝の神を勧請して箱に赤土を盛て内陣に納る時幣をふり再拜して此物は木にも非ず土にも非ず金にも非ず此に神御坐すと唱る事秘事也神籬の正印なるべし○ちけんまるかしは夫神籬が蛇太刀は往古先主春風に袂を翻し山花の褥に酔い臥したまふ花樹に掛たる御太刀を忘却して歸り玉ひしに酔醒驚き立出花林の下に到り行人徘徊于ゝして不去先主問玉へば曰吾は族行の人花樹を見れば黄金を彫たる太刀有取らんとすれば忽化して蛇となる奇怪の物也と云先主見玉へば蛇縮り太刀となる則取て歸り玉ふ是より蛇太刀と申す信田身しのだみと申は信田殿一身と齊しくし玉いし故也或は信田實と云實有物は生じて天地とともに不盡して目

出度寶劔莫邪の光斗牛を射る事あり何の怪ことか有らん
又問云往昔將門關八州を從へ總州に住し給ふ而今奥州宇多行方標葉三郡を領し玉ひしは何れの世より然ること有りや答曰文治年中源賴朝佐藤泰衡を退治の時千葉介同嫡子新介ならびに五黨の面々相州武州安房上總の勢を引卒して東海道より奥州に發向し玉ふ軍功蓋代又泰衡が郎等憤り不散山北金澤より蜂起す又常胤父子下向有て大河戸四郎が頸を切て賴朝に献す千葉並五黨の面々軍費を賜ふ常胤の二男相馬次郎師常に宇多行方武石三郎胤盛は亘理大須賀四郎胤信龍狐山國分五郎胤通に宮城郡東六郎胤賴黒川の郡を知行し玉ふ此時より始ると云爾
又門當家代々三元の日血食せず精進潔齋す又白餅を不食御駒上りて肉食を勸む是何の因縁ぞ吾が爲に一を置け答云上古を語らんこと言を喰とやせん火を禁することは聖代の書に歷々たり一品式部卿葛原親王より始めり日本は神國にして崇敬の心を先とす年月日の始なれば清淨潔白陽神を迎ひ給ふ不肉食事は嗜欲の情を動さん事を恐る將門は中興の祖也爰に俵藤太秀郷と云者あ